



午後に



ナカノリエ

そして、野山は結婚することになった。

結婚することになったといっても、成り行きというわけではない。
結婚したいと思っていたからだ。

会社の少し先輩の女性社員には謎が多くて、いろいろな憶測だけが飛び交っていた。
あいつは気が強くて大変らしい、とか、彼氏の浮気現場を押さえて別れたらしいとか。

そんなことはどうでもよかった。
なんとか話すきっかけがないかと思ったけれど、工作上、関わることがない。
社食でも会えば合流しようもあったかもしれないけれど、
彼女は女性社員たちとお弁当を食べているらしく、食堂でも見かけない。
飲み会の席も移動することはほとんどなく、遠くから彼女を眺めることになった。
なかなかキッカケはないもんだなと思った。

ある日のこと、意外なところで彼女を見かけることになる。
電車の中からホームに立っている彼女を見かけたのだ。
同じ路線だったのか。
とはいえ、帰る時間も違うし、朝の時間帯は本数も多く人も多い。
一緒になることを期待するのは難しかった。

そんな中で、休みの日に地元で彼女を見かけるとは大きなハプニングだった。
声をかけるかどうか迷っている暇はない。
声をかけることができた。
彼氏がいないことも分かった。
友達を訪ねてきたことも分かった。
勇気を出して、駅まで送って、別れ際にこういった。
「連絡先を教えてください。」
先輩は少し笑って、連絡先を交換してくれた。

そして、次の土曜に会う約束をした。
映画を見に行き、昼ごはんを食べ、夕方まで一緒に過ごして別れる。
何度かそんなことを繰り返した。
噂のような棘のある印象は全くない。
かわいい人だ。
あの人ももっと一緒に過ごせたらいいのに、そう思った。

野山は実家暮らしをしていた。
実家暮らしの姉がいて、両親がいて、祖母がいた。
姉は特に独身主義ということでもないようだが、恋人と結婚する様子もない。

社会人一年目の冬、飲み会の折に、先輩からこう言われた。
「野山君、貯金はしているかい？」
「貯金ですか？」
「そう」
「いや、そんな大した額は」
「もう、社会人になって、一通り好きなものは買っただろう？」
「そうですね」
「じゃあ、これからは貯金するといい。何にせよチャンスはいつ来るかわからない。
その時に急に大きな額が必要になっても慌てるから、貯金しておくといいよ。
ま、もっとも、それはオレの経験だけだね。」

それから、野山は毎月貯金をすることにしていた。
実家暮らしなので、一人暮らしの家賃分くらいは毎月貯められる。
もちろん実家にも食費は入れた。
それから奨学金を返して、残った分を小遣いにした。

通帳にはそこそこいい額が貯まっていた。
ローンの頭金にできるかもしれない。
それはなんだか希望の出る通帳となった。

「マンションを買おうと思うんです。」
今日は特別な日だ。
いつものデートではない。
「それで、僕としては、なおさんにも一緒に決めていただきたいと思っているんです。」
キッパリと言った。
「結婚して欲しいと思っているんです。」
先輩は何も言わない。
「なおさん、僕と結婚してください」
どこまでも、まっすぐに、伝えるしかないのだ。
「あの、私たちつきあっていると思っていいのかな。」
無理もない、付き合っほしいと言っていないのだから。
「僕は女性とつきあったことがないので、わかりませんが、僕はなおさんと結婚したいと思っています」
真昼のレストランで向かい合わせになって、自分の気持ちを伝えることができた。
ただ、先輩は、何かいいかけたような様子で、
立ち上がりかけて、ガタンと椅子からひっくり返ってしまった。

「大丈夫ですか？」
言葉をかけながら、大丈夫だったら倒れないよなと自分に呆れる。
「ちょっと寝不足で。あの、貧血かも、病院に行ってもいい？」
私のうち、この辺りだったから」
「そうしましょう、肩、貸しますから。」
店の人は様子を見ていたので、
「お水をどうぞ。お代は結構です。」
と言ってくれた。
「また来ます。」
その言葉を嘘にするつもりはない。
これから話すことがたくさんあるはずなのだ。
ただ今は、病院が先だ。

彼女に言われるように、路地を進んで小さな診療所についた。
彼女は診察室に消えると、しばらくして、看護師さんが出てきて、
「ここでお待ちくださいね。点滴をしているので1時間くらいかかるかもしれません。」
そう言い残していった。
今日の誘いは無理をさせてしまったかな、少し勢いづいていた自分を省みた。
しばらくして、慌しくドアが開いた。
「すみません、浅井ですけど、娘が。」
パンプスを脱ぎながら、慌しく受付に声をかけている。
「あら、浅井さん、お久しぶりね。なおちゃんすっかり立派になって、驚いたわ。」
「あの娘は？」
「今、点滴してるわよ、あと15分くらいで終わるかな、よく寝てる。」
「寝てる？」
「残業続きで寝不足だったんですって。」

「そんなときくらい家に帰って来ればいいのに。」

「もう少ししたら、顔見に行っておいて。」

「連れて来てくださった方は？」

「あ、そちらの、背の高い方」

野山は突然自分のことを言われて、慌てて立ち上がった。

「あの、野山と言います、同じ会社の後輩で」

「お世話になります、なおの母です。今日にご迷惑おかけしてしまって。

一緒にいてくださってよかったです、突然出先で具合が悪くなるなんて。

そんなに忙しくしているんですか？」

「このところ、浅井先輩のチームは締め切り前だったので。」

「そう、あの子、一人暮らしでしょう。」

実家が近いのに勝手に出て行っちゃって、心配でしたけど、

こうやって週末会う方がいるなんて頼もしいです。

あ、そろそろいいかしらね、顔見てきます。」

始終慌ただしい雰囲気、奥の部屋へと入っていった。

プロポーズの返事も聞く前に、お母さんにお会いするとは。

なんだか番狂わせのような気もしながら、感じのいいお母さんだと思っていたり、不思議な時間が過ぎていく。

そして、なおが部屋から出てきた。

「大丈夫ですか？」

「ありがとう、なんだったんだろうって感じ。なんかよく寝ちゃった。」

「野山さんでしたっけ？ありがとうございます。本当、こんな調子ですけど、これからもよろしくお願いしますね。お茶でも一緒にしたいところなんだけど、今日は息子たちが来るので、私はここで。」

「あ、ママ、ありがとう。お兄ちゃんたちによろしく。」

「じゃあね、なおちゃん」

慌ただしいお母さんは、また慌ただしい様子で帰っていった。

これで良かったのだろうか。

それから二人は改めて食事をとることになった。

なおが高校時代に来たことのあるカレー屋さんへ行った。

「なじみのお店なんですか？」

「高校生の時に、時々来たの。」

「そうなんですか。大事なお店ですね。」

「そうじゃなくてね。」

「違うんですか？」

「そうじゃなくて、私、野山さんと結婚することに決めたの」

そんな言葉を待っていたのに、いざ言われるとドキリとした。

「これからマンション観に行こうよ」

「これからですか？大丈夫なんですか？」

「もうよく寝て元気になったから大丈夫。善は急げだもの。」

「予約とかするもんじゃないですかね？」

「そうだった。じゃあ、住みたい街に行ってみようよ。」

「じゃあ、これから、なおさんのところに行きたい」

あのホームに降りてみたい。そう思っていたのだ。それがこれから叶うことになる。

僕たちは出会ったばかりだ。

お互いを遠くに眺めていただけだ。

お互いのことはわずかしか知らない。

だけど、それがどうしたというのだろう。

長い間眠っていた気持ちが、ようやく目覚めの時を迎えただけのことだ。
これからお互いを知り合っていけばいい。

これからゆっくり時を重ねればいい、そう思いながらも、今日はぐっと距離が縮まる気がした。
だとしても、それは幸せの序章だ。
これから一緒に長い時を重ねるのだ。